

容認、お互いを 受け入れること： 「A Two Way Street」



山梨県立上野原高等学校外国語指導助手
Natalie Bell ナタリー・ベル



↑小学校の国際交流の日に新しい友達を作りました

どれだけ日本語が話せても、日本に何年住んでも、「外国人」として日本社会に同化することは絶対にできないと、多くの人が主張します。私も、ある程度は、同意します。しかし、なぜそこまで否定的に考えるのでしょうか？

私は外見的にまったく違いますし、まったく違う文化圏から来ています。だから無駄に対等の立場を望むよりは、日本社会の中で与えられた「外人」としての役割を果たすことに満足しています。日本社会で受け入れられようとして、自分を変える必要はありません。実際のところ、外人独特の個性・特性を保ったほうが自分と周りの人々との関係に有利だと思います。周りの人々に同じだと見られるように努力するよりも自分が彼らとは同じでないことを自覚し、行動するのが賢明だと思います。

二〇〇三年に友人にボランティア活動の美德を教えてもらって以来、私はいろいろなボランティア活動に参加してきました。

日本に来た時、地域の英会話グループに参加したいか聞かれました。地域の人たちと会うすばらしい機会として早

速参加しました。それでこの三年間、毎週木曜日の夕方は二時間ボランティアで生徒たちの英会話を手伝っています。今は、とても親しい友だちになりました。いつも老人たちと行動しているからかわれませんが、祖父母のありがたさをやっとな認識し始めた頃に自分の祖父母を亡くした私にとっては日本のおじいちゃん、おばあちゃんができたようで、楽しい時間を過ごしています。

私はよく友だちの家にご飯を食べに行きます。七〇歳のすばらしいおばあちゃんですが、彼女の息子さんとご主人は彼女と話すよりテレビを見ながら夕食を食べています。私が行くと、二人で話しながら料理します。家を出た娘が恋しいのかと想像しています。ご主人が外国人が苦手だと言ったことで、初めからこのような関係であったわけはありません。当初は、毎週の英会話レッスンを居間で行っていました。徐々に時間が経つにつれ、私はまるで家具の一部であるかのように受け入れられ、今では台所に入って行くまでになりました。今では帰りに私の家まで一人でご主人が送ってくれます。

去年からご主人の仕事で私の町に引っ越してきた五〇歳の主婦が英会話に来ています。あまり町に馴染んでいませんでしたが、私たちが親しくなり、特に二人でエアロビクスに行くようになってからは、人生が楽しくなってきたと話しています。その友人が私に町のカラオケコンテストに参加する

ことを勧めました。日本語の曲を習い、歌うことに挑戦しました。結果はなんと一位。賞品は電動自転車。近所のお店や郵便局、銀行に歩きたび苦労していた坂道にぴったり。一位を取るよりも、応援してくれたみんなの笑顔にもっと感動しました。自分が達成したことが他の人にとっても非常にうれしいことだと思つと、とてもうれしかったです。その感動はうまく言葉では表現できません。

日本に来てからJETを通してできた他の日本人の友だちが身内や友人には話づらいことや困ったことを私に相談してくることがあります。多分、私の持つ「異文化性」が違う見方や意見を提供できることで彼女達の背負った重荷が少しは、軽くなるのでしよう。

最近両親が日本に来ました。三年振りに娘と再会したことや、手作りの日本料理で歓迎してくれた日本人の親切心、寛大さにとても感動していました。父親が泣くのはほとんど見たことがありません。しかし、



↑ 四国の松山の伊佐爾波神社で浴衣を着ました

両親に会いに来てくれた一五人ほどの友人たちの前で一言話そうとした父親は涙ながらに、言葉に詰まりながら話していました。二カ月の訪問が終わり両親が英国に戻るとき、皆、笑顔で抱きあつて「ようなら」のあいさつをしていました。誰もためらうことなく抱きあつて。



↑ 友達の結婚式でケーキの飾りを手伝いました

話は尽きません。最初は私と日本人の友だちや同僚との間には明らかな壁がありました。でも、通常いわれているような「突き破れない」壁でしょうか？ そうではないと思います。そうするには努力が必要でしょうか？ もちろん、「突き破れない」壁を崩そうとすれば絶大な努力が必要です。「尊敬」は当然得られるものだと横柄に考えてはいけないと思います。

どこに行っても社会の偏見を乗り越えることはむずかしいことです。外見が違つたりすることで不公平な扱いを受け、拒否されうに、「自分が他の人たちとちがう人間である」「異文化人である」ことで友好的な注目を絶大にあびることもあります。それは社会の普通の一員であれば経験しないよ

うなことです。こんなに素晴らしいことをあきらめたい人がなぜいるのか、私には理解できません。幸い、私は日常生活の中でお互いに影響しあえる人たちに囲まれています。単に「外国人」として見られることはもうありません。私は、彼らの友人であり、たまたまイギリス出身の人間です。それで十分だし、私にはふさわしい生活です。



Natalie Bell

私はイギリスのシェリングハムという小さな海辺の町で育ちました。UCL大学では動物学を研究しました。卒業後JET Programmeに参加するまでは、世界中を旅したり高級私設秘書としてロンドンの国立歴史博物館に勤務したりしていました。現在の仕事にやりがいを感じており、この経験を生かし帰国後は生物の教員になろうと考えています。

リズムを掴む



兵庫県上郡町立上郡中学校外国語指導助手
Joseph Schott ジョセフ・スコット

兵庫県西部の千種川の川沿いに小さくて静かな上郡町(かみごおりちょう)という町があります。この地域は南北朝時代の武将、赤松円心のゆかりの地として知られているけど、世界最高性能の放射光を生み出すことができる大型放射光施設(SOR-LINK)もあるの、「さわやかに歴史と未来の出会うまち」というスローガンが掲げられています。山に囲まれて緑の多いこの地に三年前から私は暮らしています。

JETプログラムに初めて参加したときには、友だちや家族から離れても平気だろう、日常生活は日本語でもいけるだろう、せめて一週間もあればこの草の根の国際化というものを首尾よくこなせるだろう、という風に考えていましたが、上郡町に到着してから全てが大変違っていたことをすぐ実感しました。けれども、困難を克服して自分のリズムを掴むことができたことはJETプログラムで過ごした時間をとても価値のあるものにしたと思っています。

慌ただしく旅行やオリエンテーションや研修会などを終わらせて、ALTのための小さな離れた一軒に辿り着きました。荷物を降ろして、ゆっくりと部屋の様子を見ながら、地元から遠く離れてきたことに気づきました。研修会でできた友だちでさえ遠く離れて、携帯もパソコンもなく、そして少し空腹になってきました。食事はどこで買えばいいのだろうか。かなり落ち込んでいました。ムカデとの出会いがまだ待って



↑授業中のひとコマ

いることも知らずに。

JETプログラムでの経験を好転させたことは二つありました。まず一つ目は、多くの人々から思わぬところで親切にもらったことです。二つ目は、失敗を重ねながらも生徒とコミュニケーションを取ったり、学校で貢献したりできたことです。生徒や同僚などとのつながりは一週間ではさすがに作れなかったけど、一年が終わるころにはちよつとずつこの小さな町に慣れてきたことと、向こうからも慣れられてきたと思います。

それでは、まずムカデの話に戻しましょう。最初に踝の一カ所を噛まれたことで、片足で跳びながらイタツイタツと呟いたり



↑体育祭にて、10段ピラミッド完成！

校は毎年ちよ
つと特別な行
事を行います。
男子生徒は二
〇〇人集まり、
一〇段ピラミ
ッドを作成し
ます。この光
景を最初目に
した時は軽い

しました。数日後、腫れてきた手のピリピ
リ感で起こされ、小さな化け物が手の平に
また噛みついたことに気づきました。それ
で、学校での私の担当者に薬などについて
電話して尋ねたところ、「ちよつと待って」
としか言われませんでした。たちまち、そ
の人は私のアパートに来て、塗り薬と大き
なターゲットの中にムカデが描いてあるス
プレー缶といくつかの日本のおやつを靴か
ら出しました。最初はそんなに優しい人と
思いませんでした。その親切さを期待して
いなかったのです、ちよつと驚きました。
でも、まだ学校でその優しさを返すこと
は難しかったです。教室で生徒に英語で声
をかけたけど反応はあまりありませんでし
た。新しい活動やゲームを紹介したら喜ん
でいたけど、本当にコミュニケーションを
取る機会はあまりありませんでした。一緒
に座って話をする時間ありませんでした。
そして、体育大会の練習が始まりました
。行進やラジオ体操以外では、上郡中学

ショックを受けて、こんなに危ないことを
本当にしてもいいのかと想っていたのだけ
れど、時間が経つと、生徒がどれほど必死
で、どれほど団結してこの偉業を成功させ
たいという意志を持っているか見えるよう
になりました。私は段々アドバイスをあげ
たり、励ましたりすることができるようにな
りました。このように生徒と取り組んで、
頑張り！という声を出したり、落ちてくる
子どもをそのまま受け止めることで、教室
の様子も向上して、以前よりリラックスし
た雰囲気、乗りがよくなってきました。
JETプログラムでの活動の中で、もっ
とも満足できるのは週に一、二回ある小学
校への訪問です。小学校にはリラックスし
た雰囲気もあり、授業にゆとりもあるので
色々な創造的なレッスンや活動を子どもに
紹介することができました。一番印象的な
レッスンは放課後特別にアルティメットを
教えたことです。アルティメットというの
はフリスビーを使用するバスケットボール
を合わせたような競技で、世界中で広がっ
ています。学校のグラウンドを使って、立
候補した高学年の生徒に投げ方や受け方
を練習させて、基本のルールを説明してか
ら皆が帰るまで一時間ぐらい試合を行いま
した。
このような経験がJETプログラムで過
ごした時間を価値のあるものにしました。
観光客として日本の名物を見たりするのは
割と簡単ですが、実際に生徒と行った人間



Joseph Schott

25歳。オハイオ州、アメリカ
で生まれ。1カ月間の留学旅
行で日本に興味を持って、J
ETプログラムに応募した。
現在は四年目のALTで、趣
味はハイキング、ロッククラ
イミング、アルティメット。

ピラミッドの
作成やフリス
ビーの試合を
することはJ
ETプログラ
ムに入ったか
らこそできま
した。来日し
てからの数日
はちよつと難
しかったかもし
れないけれど、
自分のリズム
を掴んで、この
小さな町とつな
がりを作って、
この前の三年間
を他のところで
過ごせば良かった
とはとても考え
られません。



↑生徒と一緒に

Acceptance: A Two Way Street

Many people proclaim that you can never fully assimilate into Japanese society if you are an “outsider”, no matter how good your Japanese or how long you have lived in the country. In essence, I feel this is also true. However, I don’t really understand the resentment. I look completely different and come from an entirely different culture. So, rather than futilely striving for equality, I am happy to accept my given role in society as the “*gaijin*” and I’m better off for it. You don’t have to change who you are to be accepted in Japan. Actually, I think it helps both you and your interactions if you actively try to retain some of those uniquely “foreign” characteristics. It is more beneficial to educate by being different, than wasting time trying to get people to see you the same.

Thanks to a good friend of mine instilling in me the virtues of volunteering, I have been doing various volunteer activities ever since 2003. When I came to Japan, I was asked to join the local English Conversation Class and I jumped at the chance, as I knew it would be an invaluable way to meet people. So, every Thursday for the past 3 years, I have been volunteering to go to this two hour evening class to help the students with their English and they have become some of my closest friends. I get teased for hanging out with older people, but having lost both sets of my grandparents at a

time when I was just truly beginning to appreciate what they had to offer, I have loved the opportunity to be adopted by some Japanese replacements.

I regularly make an appearance at my best friend’s house for dinner. A lovely 70 year old lady who prefers it when I come to dinner, as she usually gets ignored by her son and husband, who sit and eat in front of the TV. When I come round, we gossip and cook the family meal together, something I feel she misses her daughters who have left home. This arrangement wasn’t always so intimate. At first, it started out as a weekly Japanese/English exchange in her front room, as I was informed that her husband was “scared of foreigners”. Slowly, over the years, I have become part of the furniture and am now welcome in the kitchen, and the once frightened old man now offers to drive me home by himself without the need for his wife for support.

A 50 year old housewife just started coming to class last year, she was forced to move to our town because of her husband’s job. She didn’t really like it, but has told me that since we have become good friends and aerobics buddies she is enjoying life more. This lady convinced me to enter my town’s festival karaoke contest.

Finding a Rhythm

Along the Chikusagawa River in Western Hyogo Prefecture, there is a little town called Kamigori. The town’s slogan reads “a place where the past and the present come together.” Known as the birthplace of a minor historical figure, Akamatsu Enshin, it also hosts “SPring 8,” one of the world’s largest synchrotron radiation research institutions. Surrounded on all sides by mountains, this small town has also been my home for the past three years.

When I first joined the JET Programme I imagined that I wouldn’t mind at all having an entire ocean between me and my friends and family, that getting along day by day in Japanese would be easy, and that within a week I would be able to form vital connections with students and fellow teachers to promote grassroots internationalization. Unfortunately, I was wrong on three counts, and my time on the JET Programme began with some startling realizations. It was overcoming these difficulties and finding my own rhythm that has made my time on the JET Programme so valuable.

After the whirlwind of travel and orientations, I set my luggage down in a small three room house, said goodbye to my supervisor, and slowly looking around began to realize how far away from home I’d come. I was distant from everyone I knew, with no phone or

computer, and starting to feel a little bit hungry. Where would I go to buy food? I was feeling a bit down, and I hadn’t even met my first *mukade*, a large poisonous centipede.

There were two things that turned my experience on JET around from this first lonely scene to the amazing experience it’s become. The first was the unprompted, unexpected kindness from so many people I never thought to hear from. The second was finding, after many failed attempts, ways to interact with my students and fellow teachers and contribute to my school. The vital connections I had wanted to make didn’t materialize in a week, but by the end of my first year, I realized that slowly but surely I had made a place for myself in this small town.

First let’s rewind back to the day I met my first *mukade*. After one bite to the ankle that left me hopping around yelping in pain, the little monster soon scored another hit on my palm while I was sleeping, and I woke up to a rapidly swelling hand. I called my supervisor to ask the name of the medicine that would bring the swelling down, but instead he came in person straight to my house. He brought with him the medicine I was curious about, a large canister with a picture of a *mukade* in crosshairs, and a few Japanese snacks. I wasn’t expecting



Natalie Bell

I challenged myself to learn and perform a song in Japanese and somehow I ended up winning. My prize? An electric bicycle. A great help up the massive hill to my nearest supermarket, post office and bank. What was even better than winning was how happy it seemed to make everybody else. Having someone tell you that something you did was the most exciting and enjoyable moment of their life. Well, words can't describe how that felt.

Other Japanese friends I have made on my journey on JET have turned to me in times of crisis, as discussing such sensitive matters within their own social networks might unduly bring shame on them or their family. I can provide a welcome ear and different perspective because of my "foreignness" hopefully being able to relieve some of the burden they must feel keeping such things to themselves.

Then, there was my parents' visit to Japan. After three years of not seeing their daughter and confronted with a huge spread of home cooked Japanese delicacies all in their honor, they were overwhelmed by the generosity and warmth displayed by my friends. I have rarely seen my father cry. However, when giving a small speech to the 15 or so expectant faces that had turned up especially to meet them, he stumbled over words with tears in his eyes. At the

end of their two-month stay, I looked on and smiled when the time came to say goodbye and everyone joined in embracing my Mum and Dad. Hugs all round. Nobody flinched.

And I could go on. Initially, there was definitely a perceptible barrier between me and my Japanese friends and coworkers, but, is it, as is so often widely reported, impenetrable? Fundamentally, no. Did it take work? Yes, but then most rewarding relationships do. Respect is something that is earned not something that should be arrogantly expected.

Wherever you go, it's difficult to overcome the prejudices of society. People are treated unfairly because of the way they look, usually with negative consequences. But in Japan, my experiences have shown, that being different seems to garner an unwarranted amount of positive attention, which wouldn't occur if you were an ordinary member of society. I can't see why anyone would want to give that up. Thankfully, within the community of people I have the pleasure of interacting with on a daily basis, I'm no longer merely seen as the "foreigner". I am now their friend; that just so happens to come from England. This suits me fine.

英語

Joseph Schott

that, and his kindness caught me more off guard than the insect.

Still, I had trouble finding ways to pitch in at school. In class I spoke English for the students and showed them new activities and games, but there wasn't much chance to interact with them. There was no time or place to actually sit down and have a real conversation. Then, soon after I arrived, my school began practicing for sport's day. Aside from the marching and mechanical exercise, my school does something a little special every year. 200 students get together and form a pyramid ten people tall. At first I was shocked that something this dangerous was going on, but after some time passed, I began to see how the students really banded together to accomplish such an intimidating task, and as my relationship with them improved, I became able to encourage them and give them helpful tips and advice.

After helping out these students, either verbally or by actually catching them out of the air when they fell from the pyramid, I noticed that they were more relaxed in classes with me, and more willing to participate.

One of my favorite parts of teaching English in Japan has been my weekly visits to elementary schools. Elementary schools have a very relaxed atmosphere, and I was able to create many unique

lessons for the students there. The lesson that remains in my mind the most is a special class after school where I taught them how to play Ultimate Frisbee, a game I enjoyed in the US and now Japan. I took volunteers from the 4th to 6th grade and after school grabbed one of the dirt fields outside of school. Then I had them practice throwing and catching, taught them the basic rules, and played a game with them for an hour or so before it was time for everyone to go home.

It has been opportunities like this that have made my time on JET important to me. I can come to Japan and see the sights as a tourist very easily, but a chance to actually help a class of students put together a human pyramid or play a game of Frisbee is something that I would never have experienced any other way. Things might have looked tough during my first few days in Japan, but after finding my rhythm and getting involved with this small town, I can't think of any better way I could have spent the last couple of years.

Hello, my name is Joseph Schott. I am 25 years old, and come from the state of Ohio in the USA. I became interested in Japan after a short study abroad and joined the JET Programme in 2006. I am now a 4th year ALT, and my hobbies include hiking, rock climbing, and ultimate Frisbee.

英語